

MAGAZINE OF TEIKYO
ALTERNATIVE LIFE [フレア]

Flair

VISION BOOK

みんなのミライ、ここにありました。



RE: TEIKYU MIND

〈努力をすべての基とし 偏見を排し 幅広い知識を身につけ

国際的視野に立って判断ができ 実学を通して創造力および人間味豊かな

専門性ある人材の養成を目的とする〉

これは帝京大学“建学の精神”。これを現代語訳してみると――

SEE THROUGH WITH YOUR OWN EYES.

――きちんと自分の目で見よう。

EXPLORE EVERYTHING AROUND YOU.

――たくさんを知ろう。

EXPLORE THE WORLD.

――世界を知ろう。

HAVE A LIVELY IMAGINATION.

――柔軟な想像力を身につけよう。

JOY TO CREATE.

――そして、創造を楽しもう。

MOVE ON AND ON.

――もっともっと、先へ進もう。

CREATE THE NEW VALUE FOR YOUR AGE.

――世の中に新しい価値を生み出そう。

JUST BE YOURSELF.

――ぜんぶ、自分らしく。

2016年、創立50周年を迎える帝京大学は、この節目の年に

いまいちど原点である“建学の精神”に立ち返ります。

3号にわたる『Flair』特別号の第2弾は、

帝京大学から巣立った卒業生のインタビュー集。

さまざまな分野で“自分流”を貫き、

建学の精神を体現し、

日々切磋琢磨している卒業生たちの姿から、

在学生はどんなVISION（未来の自分）を思い描くでしょう。

帝京大学50年の歴史を映してきた卒業生たちは

これからの50年のヒントをみんなの未来に残します。

先輩、あなたのこれまでとこれからを教えてください！



伝統を受け継ぐのは面白い？ それとも退屈？

伝統やルール、確立された常識を「疑う力」。

帝京大学出身の

大和冷機工業株式会社

代表取締役社長・尾崎敦史さん、

そしてかつて帝京大学で

講義を受け持っていた舞の海秀平さん。

帝京大学にゆかりのある

ふたりによる異色の対談が実現した。

まさにスペシャルな“取り組み”だ。

それぞれの帝京大学、

そしてイギリスという共通点。

——ともに帝京大学にゆかりのあるおふたりですが、まずはじめに、大和冷機工業がどのような会社か教えてください。

尾崎敦史(以下、尾崎) 当社は業務用の冷設機器、つまり大きな冷蔵庫や製氷機、ストッカーなどを扱っています。製造から販売、メンテナンスまで一貫しています。もしかしたら相撲部屋でも、使っていませんでしたか？

舞の海秀平(以下、舞の海) 使っていましたね。家庭用冷蔵庫では足りませんから。

尾崎 飲食店は入れ替わりが激しく、数年でお店が変わってしまうことが多々あります。

スポーツ解説者・タレント

舞の海秀平 | 
SHUHEI MAINOUMI

1989年、日本大学経済学部卒業。大相撲入りし「技のデパート」の異名をとる。2000年度には帝京大学で講師を務める。現在は多くの著作のほか、NHK大相撲解説者やスポーツキャスターなどとして活躍中。

大和冷機工業(株) 代表取締役社長

 | 尾崎敦史
ATSUSHI OZAKI

1994年、帝京大学文学部卒業後、大和冷機工業入社。2002年に代表取締役に就任。「冷」の技術が拓いてきた食の安全と美味しさ、快適さを追求している。環境保護も視野に入れながら「トータル力」を提供。

だからといって、新規店舗のすべてが新品の冷蔵庫を購入されるわけではなく、居抜きや、中古などの使用も多いのです。衛生面を考えると、だいたい7年くらいで買い替えるので、その7年間で、サービスやメンテナンスなどを通して、お客様との信頼関係を築いていけるか。それがないと次がありません。

舞の海 たしかにその7年の間に嫌なことがあったら、次は別の会社にしようかなとなりますよね。やはり人なんですね。

尾崎 はい。さらに最近では、冷たいものだけではなく、熱機器関係も自社で生産する新製品を取り揃えていこうとしている最中です。

舞の海 熱機器というと？

尾崎 フライヤーやコンベクションオーブンです。トータル厨房の提案をめざしています。

——尾崎社長は帝京大学出身ですが、大学生活で思い出に残っていることはありますか？

尾崎 1年弱、イギリスのグラム分校に留学したことがいい思い出です。個人的にも初めての海外体験。大学の近くにバブがあって、地元のおじいちゃんたちといろいろ話して交流できました。日本人のメンタリティに近いですね。

舞の海 私はロンドンオリンピックのときにキャスターの仕事でロンドンに1ヵ月滞在しましたが、たしかに日本に似ているなど。街の作りなんかも似ていて、ここなら一生住めるなという印象を持ちました。

時代に合わせて柔軟に、
伝わるように、伝えること。

——一方、舞の海さんは、帝京大学で講師を

本気が、本能や感性を呼び起こす。



していました。当時の帝京大学生にはどのような印象を持ちましたか？

舞の海 今の学生はおとなしいですね。講義中はだれも手を挙げないのに、講義が終わったら質問にくるんですよ。相撲界も同じです。若い力士はおとなしい。そういう時代なんですね。私が学生のときは、大相撲に挑戦したいという気持ちが強かったです。とにかく挑戦して、飛び込んで、そのなかでどれだけ番付を上げていけるか。自分自身に対する興味がありました。

——大和冷機工業は、先代が起こした会社ですが、2代目である尾崎社長にとっては、すでに形のあるものを受け継ぎ、それを守りながらも発展させていくという使命があると思います。それは自由に自分の会社を起こすことよりも難しいことではないでしょうか。そもそも舞の海さんが言うように、時代も人も違いますよね。

尾崎 当然、今の世代の人たちに合わせる事が大切です。“我々の時代はこうだった”という戯れ言は通用しません。自分勝手に話すことは簡単ですが、それが必ずしも相手に伝わっているとは限らない。伝えるように伝えることは非常に難しいことです。舞の海さんは、講師などのときに工夫されていることはありますか？

舞の海 永遠の課題ですね。講義にしても解説にしても、ただ自分の知識を一方的に伝えるような話し方ではうまくいきません。相手はまったく別の人間ですから。話しながらも、もうひとりの自分が“相手に伝わっているのだろうか”と常に考えながら話しています。

真剣に考えることが常識から逸脱させる。

——舞の海さんの現役時代は、数々の技を繰り出すスタイルでファンを魅了しました。どれも独創的で、それまでの相撲界の常識を覆すようなものでした。あれらの技は、どのような発想から生まれたのですか？

舞の海 単純にへそ曲がりなんですよね。常識と言われるものを、“本当にこれは常識なのだろうか？ここ10年の常識なんじゃないだろうか？4、50年後にはもう常識ではなくなっているのではないか？”。常にそんなことを考えています。相撲界に入るときも、身長が173センチメートルないといけません。でも身長が低くても、工夫次第で大きい人を倒せる可能性はある。どうしてもそれを証明したくて、その気持ちが頭にシリコンを入れて入門試験を受けるという行為に向かわせました。

尾崎 実際に大きい力士たちを倒していきま

したよね。それは決してシリコンのおかげではなく、舞の海さんの努力。常識にとらわれてしまうと、新たな発想というのは生まれてこないんだと、お話を聞いて確信しました。そのような常識を疑う力は、どのように培われてきたのですか？

舞の海 子供の頃は常識自体を知らないで、常識を疑うという概念もないと思うんです。プロになって、ふと、“相撲で飯を食っていかなければいけないんだ”と思ったときに、気持ちがぐっと入りました。限られた自分の小さい体でどうやったら大きい人を倒せるかと、真剣に考え始めたんです。そうすると取り組む姿勢や気概が変わってきます。すると、やはり常識から外れていくんですよ。大学のときも色々苦しかったけど、相撲で飯を食っているわけではなかったし、実はぬるい世界にいたんだと。学生時代はげかに甘えて、自分をだまし、周りをだまし。そういう姿勢で稽古していました(笑)。



「伝わるように伝える」努力をする。

るにつれて、縁の大切さを身にしみてわかるようになりました。

伝統とイノベティブ。相反するものをつなぐ視点。

——まったく新しい分野を起こすことや未知のものに挑戦することがイノベティブだと思われるがちですが、すでに確立された世界で戦い、維持していくことが難しい。伝統を打ち破るということは必要なのでしょうか？

尾崎 それが本当に必要なことなのか疑うことが、結果的に常識を打ち破ることにつながるのだと思います。厨房業界にも、まだまだたくさん疑う余地がありそうです。

舞の海 大切に守ってきた精神とか技術を守りながらも、時代のうねりや変化にはどうしても勝てないという現実があります。だから変えるところは変える、残すところは残す。その見極める力が重要だと思います。

——打ち破ろうとする以前に、まずパースペクティブ=視点を変えていくこと。それがイノベティブにつながるということですね。

尾崎 環境がそうさせるんですね。

舞の海 はい。その環境でなんとか生き延びていかなくてはいけないと本気で考えると、眠っていた本能や感性がどどん呼び起こされてくる感じがしました。

——環境という面では、尾崎社長も、社長になるということは、責任感や統率力など大きく変わってくると思います。やはり立場や環境が人を変えるのでしょうか？

尾崎 2002年に代表取締役になった当時は、

何でもできると欲張ってました。怖いものなしのような、強気の気持ちを持たなければいけないと思い込んでいたんです。ただし、他の諸先輩方たちと接点が増えていくにつれて、考えを改めました。自分はこれまでたくさんの経験を積んで舞の海さんのように“一生懸命練習して”きたわけではありません。当時はわかっていませんでした。ただし、悲観しているわけではなく、人と接することで気づかせてくれた縁に感謝していますし、年齢を重ね



ショールームで、尾崎社長から「真空包装機」や「スチームコンベクションオープン」「プラスチックラ」など業務用の新調理システムについて説明を受け、それらでつくられた料理を試食する舞の海さん。簡単に、おいしく料理ができる技術力に驚いていた。



01

世界へ挑戦すること。
それは自分への挑戦でもある。

—
AYUMI UEKUSA

東京オリンピックで金メダルを。
夢を叶えるために、再び空手の道へ。

日本にとって、21世紀最大のイベントのひとつが東京オリンピックだろう。すでに4年後の開催へ向けてオリンピックの話題がテレビや新聞をにぎわしている。東京オリンピックでは、新しい種目が追加される予定だが、その有力候補とされているのが空手だ。そんな中でも、ひととき注目を集めている選手がいる。昨年、医療技術学部を卒業した植草歩さんだ。

女子空手選手の中では高い身長と群を抜くスピードを武器に、2015年全日本空手道選手権の個人組手で優勝、2014年世界空手道選手権でも銅メダルを獲得した。全日本の強化選手にも選ばれ世界一にもっとも近い選手のひとりだ。植草さんが注目されているのは、実力もさること

ながらその愛くるしい容姿。その見た目から、「空手界のきゃりーぱみゅぱみゅ」とマスコミで取り上げられることも。大学卒業後は高栄警備保障株式会社に就職し、現在、社長秘書を務めながら帝京大学総合武道館に通い、日々、空手道を極めている。

植草さんが空手を始めたのは小学校3年生のとき。自他ともに認める“おてんば”で、幼なじみの男の子に誘われたのがきっかけだった。「見学したときに、ちょっと体験をさせてもらいました。ミットに当たったときのパンツという音がすごく気持ちよくて、楽しいな、と」

道場に通い出してから、わずか2年で全日本少年少女空手道選手権3位に。めきめきと頭角を現し、名前は全国に広まった。そして、高校3年生で国体優勝を飾ったのが目に留まり、帝京大学空手道部の香川政夫師範から声をか

先輩、後輩、同期……

みんながいたから成長できた。



FILE #01

EXPLORE THE

WORLD

勤め先の高栄警備保障には朝7時に出勤。社長秘書として集中的に仕事をこなす。「仕事が早い。ひとつ言えば2つ3つやる。カンがいいから世界で通用するのは」と高橋社長。午後からは八王子キャンパスでトレーニング、夕方からは空手道部の後輩たちと汗を流す。空手漬けの毎日だが休日には買い物を楽しんだり、どこにでもいる23歳の女性だ。

けられた。

「空手の世界では『天下の帝京』です。私なんか行っているのか悩みました。ですが、『才能を認めてもらっているのに行かない理由はあるのか』という父の声に後押しされて、挑戦しようと思いました。もっと強くなりたいと」

しかし、そこで待っていたのは今まで自分が体験したことのない世界だった。これまで多くの全日本や世界チャンピオンを輩出してきた帝京大学空手道部。その練習の厳しさも並大抵でない。

「もう圧倒されて……。力だけでなく心の面でも劣っている部分があるなと感じました」

それまでは「ただ楽しいから」という思いで空手を続けてきた植草さんが初めて味わった挫折だった。入部当初は毎晩のように泣いて実家に電話をしていたと言うが、支えとなってくれたのが仲間の存在だ。「練習中に泣いてしまったこともありましたが、みんなが声をかけて励ましてくれた。空手道部はみんな一緒に寮で共同生活をしているんです。師範がめざしているのは『家族のようなチーム』。だから、みんなライバルだけど仲がいい」

師範曰く、植草さんは「明るくて素直」。その言葉の通り、前向きに練習を続けて才能を開花させ、「手が届かない存在すぎた」日本一の座を手にした。大学卒業時には「もう思い残すことはない。やり切った感があった」と空手の世界から引退しようと思っていた植草さんだったが、それを引き戻したのが、東京オリンピックだった。

世界で勝つ難しさは、重々承知している。しかし、大舞台で世界一になりたい。今、植草さんの視線の先にあるのは金メダルだけだ。



植草歩

医療技術学部スポーツ医療学科2015年卒。2015年全国空手道選手権女子個人組手で優勝。2016年度全日本強化選手。高栄警備保障株式会社に勤めながら、帝京大学総合武道館に通い、後輩たちと練習に励む。



02

マニュアルではなく、
自らサービスを創造する。

—
YUKARI NAGATA

お客さまとともに、
いいフライトをつくりたい。

「客室乗務員は幼いころからのあこがれでした」と語るのは、日本航空の客室乗務員として活躍する永田有佳梨さんだ。母親の仕事の関係で、幼いころから海外へ旅をすることが多かったという永田さん。「機内で、いつも客室乗務員さんがやさしく接してくれました。気遣って話しかけてくれたり、お手紙をくれたり……」と子供心にも印象に残った。将来は国際的に働くことができる仕事に就きたいと考えて外国語

学部に進学。授業でエアライン論などを専攻するうちに客室乗務員への思いが強くなり、それまでの「夢」が現実の「目標」になった。専門学校にも通いながら客室乗務員になるための勉強を重ねて、晴れて3年前に日本航空に入社した。

現在、永田さんは国際線を担当し、ニューヨーク、フランクフルト、パリなど、10数カ国もの都市に飛んでいる。一般の乗客にとっては、客室乗務員は飲み物や食事を運んだりという機内サービスが主な仕事だと感じるはずだ。しかし、その務めは飛行機に乗る前から始まっている。出発の約2時間前には客室乗

務員が集まってブリーフィング（事前打ち合わせ）をして、乗客の情報や担当するエリアの確認など、チーム内で情報を共有する。機内に入ってからは、乗客の安全や搭載品の確認、機内食の準備などを行う。また飛行中も安全への配慮に余念がない。乗客の目に触れない裏方の仕事が多くある。乗客が安全で快適な空の旅を楽しむために努めることが、客室乗務員の仕事。そのために必要な「心配り」と永田さんは言う。

「まずは搭乗されたお客さまに目配りをします。

持っている物、着ている服、荷物はどこにしまわれるかなども観察します」

「それぞれ立場の異なったお客さま」がいるから、マニュアル通りの接客はできない。お客さまの状況や行動から気持ちをくみ取り、創意工夫をしてその場に応じたサービスを提供することが求められる。

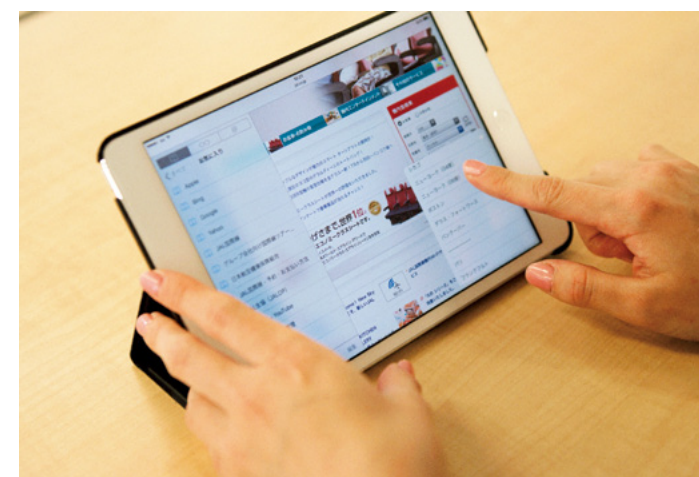
客室乗務員としてのやりがいを感じるのは、「お客さまに喜んでもらえたり、『ありがとう』と言ってもらえた時」と語る永田さん。過去に忘れられない出来事があったという。

「モスクワに向かう便でお年を召した女性が搭乗されました。声をかけると、一人旅が好きということでいろいろとお話をしました。これまでの旅の話や、おすすめの旅先をたずねられたり、私の仕事や健康のことまで気遣っていただいて……。機内販売でチョコレートを購入されたので、お持ちしたら、『これはあなたにあげるものよ』とおっしゃったんです。『いつもは機内で寝ているんだけど、今日は永田さんがいろいろ話しかけてくださって楽しかったから』と」

初めてのことで驚いたという永田さん。あの女性の笑顔は忘れることはできない。もちろん「お客さまに入りすぎたはいけない」ことは知っている。しかし、大切なのは「人と人」として相対することなのだ。

客室乗務員として「もっと引き出しを増やしていきたい」と言う永田さん。これからも乗客の笑顔と安全を翼に乗せて、大空を飛んでいく。

👉 「ありがとう」というお客さまの笑顔。
客室乗務員としてやりがいを感じる瞬間です。



飛行機の利用客は年齢も立場も国籍もさまざま。それぞれに応じた接客を行い、臨機応変に立ち振る舞うためにも客室乗務員にはたくさんの「引き出し」が必要となる。自分なりのサービスをつくり出す際には、勉強はもちろんのこと、サークル活動や課外活動、ボランティア活動など、大学でのさまざまな経験が役に立ってきたと永田さんは語る。



永田有佳梨

外国語学部外国語学科ドイツ語コース2013年卒。幼いころからのあこがれだった客室乗務員になる夢をかなえて日本航空株式会社へ入社。現在は国際線を担当しており、海外へのフライトを重ねている。



03

本当の知識とは、
自らが確かめて知ること。

—
TAKAMITSU MURAKAMI

信条は「現場が第一優先」。
作業班とともに良い現場に。

株式会社関電工の配電本部小山営業所に勤務する村上貴光さん。2014年に理工学部を卒業、入社3年目の若手社員だ。しかし、自身の仕事について語る口調は、まるでベテランのように深く真摯。それは入社してから村上さんが多くの人とかかわり、たくさんのことを吸収しようと努めてきた証だろう。

関電工は電気工事や情報通信工事、空調工事などを行う、日本を代表する総合設備企業だ。とりわけ東京電力との結びつきが強く、関東エリアで電気を供給するライフラインを維持する大切な仕事を担っている。電柱の上や高所作業車などで行われている、いわゆる街中の電気工事は関電工によるものだ。

村上さんは、子どものころから配線など電気にかかわることに興味があった。工業高校を卒業後、帝京大学理工学部に進学。そして、2011



大学で学んだことは
また異なる知識が必要となる。

年、大学2年生のときに、関電工で働くきっかけとなる出来事が起こった。未曾有の被害をもたらした東日本大震災だ。津波により福島第一原子力発電所は発電をストップした。発電量が減り、広いエリアで計画停電が行われ日常生活が麻痺したことは、まだ記憶に新しい。これを機に、多くの人が改めて電気の大切さを認識した。村上さんもそのひとりだ。「停電したときにライフラインの重要性を痛感しました。電気は絶対に使うし、日々の生活に必要なもの。せっかく電気系の学科で勉強をし

ているのだから、卒業後は電気にかかわる仕事に就きたいと思いました」「本当は内線工事など現場の作業をしたかった」と言う村上さんが、現在の仕事は東京電力と現場の作業員をつなぐ「パイプ役」だ。東京電力から要請される電気工事の内容を吟味して、作業班に仕事を託すという大切な役目。適材適所が基本だが、仕事量がそのまま作業員の評価につながることもあるので、偏らないようにバランスを取ることも大切だ。村上さんが仕事をする上での信念は、「現場の人が第一優先

だと言う。「どんなに忙しくても現場の人が『やってくれ』と言ったら自分がやります。作業班の人から『材料が足りないから持ってきてくれ』と連絡がきたら、自分の仕事を投げてでも行きます。たとえば、冬なんて16時半くらいで暗くなってしまう。そこで照明が必要だと言われたら、すぐに持って行く。事務所にいる自分は電気があるからいつでも働けますが、現場の人は照明がないと仕事ができせんから」村上さんはデスクワークが中心だが、とこと

ん現場を大切に。工事現場に足を運び作業員と顔を合わせ、その場で何が行われているかを自らが知ろうとする。「住民から苦情がきたから、謝りに来てくれ」と言われたら、現場に飛んで行く。「今日はこの工事ができなかったけど、どうすればいい?」と相談されれば、対応と一緒に考える。仕事では「大学で学んだことはまた異なる」知識が必要になると話す村上さん。これからも、新しい何かを知ろうと努めていくことだろう。

東京電力から依頼を受けた電気工事を、作業班に割り振るのが村上さんの仕事。作業員の立場でさまざまなことを考慮する広い視野と知識が求められる仕事だ。そのためにもひんばんに現場へ足を運び、自分の目と耳で体感することを大切にしている。朝から晩まで忙しい日々だが、仕事の後に先輩たちと杯を交わすのが何よりの息抜きだ。



村上貴光

理工学部ヒューマン情報システム学科(現・情報電子工学科)2014年卒。株式会社関電工に入社、配電本部小山営業所に配属。東京電力と電気工事を行う現場の作業員とをつなぐ調整役を担っている。



04

社会復帰を助けるのは、 柔軟な想像力と意思疎通。

CHISATO KAWAMOTO

患者さんの手助けをしたい。
中学時代からの思いを現実に。

ベッドやリハビリ用のさまざまな器具が並ぶ
病院の一室。いたる所で患者さんがトレーニングに励んでいる。理学療法士の川本千聖さんも、
ひとりの男性に寄り添っている。
「この方は足の手術をしたばかりなんですよ」

術後の足をマッサージしたり歩行訓練の手助
けをしたりと、真剣なまなざしを向けながらも
笑顔を決やさず患者さんに手を差し伸べている。
「病气やけがをされた方を、在宅復帰や社会復
帰に向けてお手伝いするのがリハビリですが、
『歩く』とか『立つ』とか基本的な動作の回復の
支援をするのが、私たちの仕事です」
現在、佐賀県の唐津赤十字病院で理学療法士

として活躍する川本さんが、この仕事をめざ
したのは中学生のときに祖母が腰の手術をした
ことがきっかけだった。

「そのときに、初めてリハビリというものを知
りました。私も患者さんの回復の手助けができ
たらと思いました」

高校を卒業後、福岡医療技術学部に進学、5
年前に国家試験に合格、大学を卒業して、念願



リハビリテーションでは患者さんがどのような生活を送っていたのかを知ることが重要。そのカギとなるのがコミュニケーションだと川本さんは語る。その言葉の通り、トレーニング中にもこやかに、患者さんも楽しそうだ。唐津赤十字病院には川本さんのほかにも帝京大学出身の理学療法士が勤務しており、先輩からの助力とアドバイスのおかげで成長できたという。

川本千聖

福岡医療技術学部理学療法学科2012年卒。中学生時代の祖母の手術をきっかけに理学療法士をめざす。卒業後、日本赤十字社唐津赤十字病院に勤務。理学療法士として、多忙な日々を送っている。



患者さんとの会話から、 その人生を想像することから始まる。

かなって理学療法士になった。しかし、最初は「壁」に直面した。「同じ病気やけがでも一人ひとり程度や状況は異なるので、それぞれに合わせたリハビリを考えなければなりません。まずは元の生活や趣味などを聞き出して、その人に合ったプログラムをつくることから始まります。1年目、2年目のころは自分のほしい情報を聞き出すことに苦労しましたね。患者さんによっては、話しが苦手だったりあまり自分のことを話すことが好きでない人もいます。そのような方にどのように心を開いていただき、言葉を通わしてもらおうかが、大変でした」

理学療法士に必要なのは、コミュニケーションを通して患者さんの人物像を理解し、日常生活へ復帰する“道”を作る柔軟な想像力。

そのためには「家族の話を聞いてあげるなど、メンタル面での支援が大切だ」と気づいた。

なるほど患者さんと接している川本さんは、会話を絶やすことがない。だから対する相手も実にこやかに。

「まずはコミュニケーションを取らないと先に進みませんからね。実はリハビリをしたくないという方は多いんです。実際、けがなどの後は体が痛い。患者さんは気が進まないことをするわけですから、できるだけ楽しくリハビリをしていただきたいと思っています」

この5年間で、先輩の理学療法士や患者さんから、さまざまなことを教えてもらった川本さん。学校で勉強することはもちろん大切だが、学生時代に培うべきことがあるという。

「私も勉強をたくさんしたわけではないのですが（笑）、現場に出たら勉強は嫌でもしなければいけないんです。知識も重要ですが、人とかわかること、コミュニケーション能力を身につけないと」

退院した患者さんが、「こんなによくなったよ」と川本さんのものに立ち寄りしてくれることもある。そして、「あのとき、リハビリをがんばってよかった」と言ってくれることも。

また、その言葉を聞きたい。今日も川本さんは患者さんと一緒に歩いていく。

TEIKYO HISTORY

帝京大学今昔物語

今となっては昔のこと。1966年に帝京大学が緑豊かな多摩丘陵に創立された。

約200名の学生と2棟の校舎、現在の姿と比べても小さな大学だった。

そして、50年の歳月を経て……キャンパスは5つに増え、総面積は約13倍にまで成長した。

1966 → 2016



激動の1960年代

田畑が広がる多摩に帝京大学が誕生。

ベトナム戦争の泥沼化、ベルリンの壁の建設、キューバ危機、宇宙開発競争など、1960年代はアメリカ合衆国とソビエト連邦の冷戦に世界が揺れ動いていた。この2大国が軍事力で直接争うことはなかったが、諸外国を巻き込んだ資本主義陣営と共産主義陣営の睨み合いは続いていた。

1960～70年代にかけ、日本は急激な経済成長を遂げる。国民の所得が飛躍し、人びとに経済的な余裕が生ま

れるなどした。結果、大学進学率は約30%にまで上がり、大学大衆化の時代へと変わった。

そんな「激動」の1960年代に、帝京大学は誕生。場所はニュータウンを開発中だった多摩丘陵。校門を出れば田畑が広がり、キャンパスには造成された土がむき出しの場所が多くあった。50年前の帝京大学は、豊かな自然に囲まれた土の匂いが残るキャンパスだった。

無限に広がる可能性！

世界へ羽ばたく学生を育てる。

2000～2010年代にかけて、IT技術が目覚ましく進歩した。情報関連機器のスペックは日増しに向上し、端末の価格も大幅に低下。今や人びとにとってPCや携帯電話は必需品となった。帝京大学でも新しいIT技術が導入され、さまざまな面で活用されている。

また、グローバル化も現代の注目キーワード。日本だけでなく世界で活躍できるグローバルな人材が、企業から求められている。大学の教育

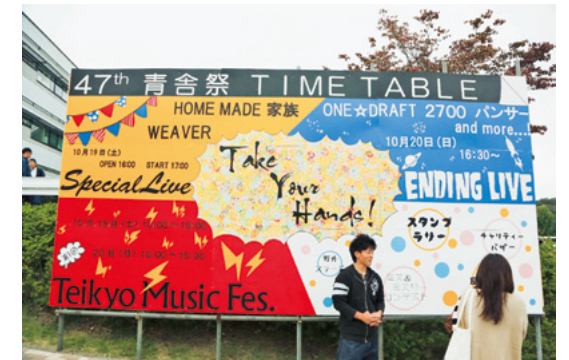
内容やカリキュラムは、時代に適した内容に変化し、学生の主体的学びの育成に力を入れている。

これら文化や技術の発展に伴い、八王子キャンパスは設備を充実させてきた。2015年9月には、多摩丘陵の豊かな景観や地形に配慮した新校舎棟「SORATIO SQUARE(ソラティオスクエア)」が誕生。現在は低層部のII期工事が進められ、2017年11月にはさらに新しい施設が完成する予定だ。

青舎祭



学生全員が楽しむ年に1度のビッグイベント。



八王子キャンパスの校舎が青かったことから「青舎祭(せいしゃさい)」と名付けられ、毎年趣向を凝らして開催されている学園祭。50年前は「帝京祭」と名付けられ、フォークダンスや運動会、焚き火を囲んで歌うファイヤーストームなどがあった。学生全員が楽しみ、社会問題に対する意見も発信できる場となっていた。

図書館



多種多様な書物が幅広い知識に。



現在は4つのキャンパスに図書館があり、蔵書数を合わせると100万冊以上にも及ぶ。所蔵されている資料はWebOPACを通して、キャンパスを横断した検索が可能。かつては、閉架式図書館で、本の閲覧にはカウンターで入納の手続きが必要だったが、便利なシステムが投入され、学生にとって利用しやすい環境に。

キャンパスライフ



友人とのんびり過ごすキャンパスライフ。



八王子キャンパスで現在の学生たちが集う場所といえば、学生ラウンジ、メディアライブラリーセンター(図書館)、食堂、第1グラウンドなど。開学当時のキャンパスでは、学生食堂や売店が設けられた学生ホールや芝生のある広場が憩いの場となっていた。

数字で見る帝京大学の今・昔

<p>学生数</p> <p>約200名 → 23,560名</p> <p>新キャンパスの開設、学部や学科の増設で、学生数は大きく変化した。50年間で2万人以上増え、1966年の頃と比べると約100倍に。2万人のうち、7割が男子学生、3割が女子学生となっている。*2015年5月1日現在</p>	<p>部活数</p> <p>10団体 → 91団体</p> <p>創立期に学生会が発足し、10団体のクラブが生まれた。その後、着々と団体数を増やし、各キャンパスを合計すると91団体ある。サークルや同好会を加えると、310団体も存在している。</p>	<p>学部学科数</p> <p>2学部3学科 → 10学部30学科10研究科</p> <p>総合大学へと発展した結果、2学部3学科だった学部学科数は10学部30学科に。創立期は専任教員と非常勤教員を合わせて81名だった教員数も、現在は専任教員だけで1,000名以上となった。</p>
---	---	--



05

相手を思うことで、
本当にその人を
知ることができる。

—
YUKIE TAKAHASHI

採用は学生の人生を左右する。
軸は会社ではなく学生にある。

現在、ドラッグストア業界は着実に成長を続けている。栃木県を拠点とし、東日本を中心に300店舗近くを出店している業界大手の株式会社カワチ薬品も、成長を続けている会社のひとつ。その人材開発室に勤務しているのが、理工学部出身の高橋幸恵さんだ。

高橋さんの主な仕事は、薬剤師の採用業務。調剤薬局が併設されたドラッグストアに薬剤師は欠かせない。生活者医療を担い、調剤事業を拡大していく上でますます薬剤師が必要となっている。「薬剤師の売り手市場」と言われる業界で、いかに安定して優秀な人材を確保するかは、会社の命運を左右すると言っても過言ではない。高橋さんは、そんな重責のある仕事入社以来16年以上も任されている。



この会社に入ってよかった。 そのことばが何よりもうれしい。

毎年、春先に新卒の薬剤師採用がスタートする。関東近郊の大学を回り、学内の就職ガイダンスで会社説明会を開催するのが、高橋さんの仕事だ。翌春卒業予定の薬学生たちに、自社を知ってもらうためだが、そこから始まる学生との付き合いは長い。翌年の入社式を迎えるまで、学生の姉のような存在として接することで、お互いのきずなが深まる。

「他の会社の採用担当者の中には、毎日メールを送ったり電話をかけたりする方もいます。私はそこまではせずに、あくまでも学生の気持ちを尊重します。採用担当者は、その学生の人生を左右してしまうと思うんです。無理やり入社してもらっても、その学生が幸せと思える人生を送れるのかは別の話。あくまでも軸は学生です」

高橋さんがこのような考えに至るまでに、入社してから5年ほど時間がかかったという。きっかけとなったのは、採用担当者として味わった苦い経験だった。

「私も入社して採用の仕事を始めたばかりのころは、30人が目標だったら30人を採用するために『何が何でも』と、学生にガツガツとアピールをしていました。『絶対入ってもらわなきゃ』という気持ちが強かったんです」

ところが、いざ内定を出しても学生が辞退してしまうという事態が続いた。その原因は何か？ を省みたときに、会社側の目線だけで学生に接している自分がそこにいた。

「もちろん、会社としてはほしい人材は採りたい。だけど、学生が何を基準に就職活動しているのかを、よく考えてあげないといけない」と気づいた。

長い時間をかけて学生たちと接するので、その人となりは十分に理解している。ところが、選考の面接で学生が緊張してしまい、質問に答えられない場合もあり、後で面接官の役員から、学生についての質問を受けることがある。そんなときには、自分自身の目で見続けてきた学生だから、自信を持ってフォローもできる。

現在、高橋さんは2人の子どもの育児と仕事を両立させている。その経験を生かして、会社で女性が活躍するためのプロジェクトにも携わっている。だからこそ、女性目線でアドバイスをすることもできる。人生の歩みとともに採用にも厚みが増した。

「入社した学生が、『本当にカワチ薬品に入社してよかった』と言ってくれるのが、仕事のやりがいですね。辞めないでずっと続けてくれてるのが何よりもうれしいです」

東日本を中心に展開するカワチ薬品の本社は、栃木県小山市にある。高橋さんは本社の人材開発室に所属しているが、会社説明会を開催するための出張も多い。私生活では2児の母親。育児と仕事を両立させる忙しい日々だが、「会社の理解と上司や同僚のおかげでうまくいっています」。その経験が学生を採用する際にも役に立っているという。



高橋幸恵(旧姓 館野)

理工学部バイオサイエンス学科2000年卒。大学卒業後、ドラッグストア大手、株式会社カワチ薬品に入社。以後、16年以上にわたり人材開発室に所属し、薬剤師を採用するリクルーターとして活動する。

06

人、そして社会のために。
地域に根ざした医療を。

SHIGEKI MIZUNO



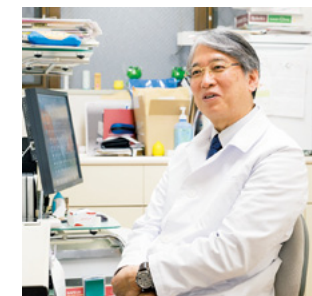
これからの地域医療とは？
最前線で見つけた答え。

東京・板橋区で開業医として活躍する水野重樹さんは、この道35年になるベテランの医師だ。1981年に帝京大学医学部を卒業してから附属病院や都立病院に勤務医として在職、25年ほど前、地元の水野醫院を開院した。地域医療を主とする水野さんの毎日は多忙だ。朝から晩まで診療所にやってくる患者さんを診ながら、昼休みの休診時間に通院が困難な患者さんへ訪問診療を行っている。また、学校医として定期的に近隣の保育園や幼稚園を回る。基本的に日曜日や祝日は休診だが、在宅の患者さんの容態が変われば、すぐに駆けつけなければならない。日々の睡眠時間は4時間ほど、365日24時間休みなした。新幹線で数時間という距離からのとんぼ返りも、「慣れっこですから」と平然と語る。

そんな水野さんが医学の世界を志したのは、高校生のときだった。
「もともと理系で生き物が好きでした。人間に対して一番役に立てる仕事は何だろうと考えて、医学部へ進もうと思いました」

入学当初は病理や研究など基礎医学を専攻しようと思っていたが、「授業で臨床を学んでい





水野重樹

医学部医学科1981年卒。帝京大学医学部附属病院、都立病院などの勤務医を経て、1990年、地元である板橋区に水野醫院を開院。2015年より、530名の医師を擁する板橋区医師会会長の重責を担う。



地域医療は医療の最前線。

医師には総合的な能力が求められる。

るうちに、やはり自分は人間を診たいんだという気持ちになって臨床医の道に進みました。

その思いは今も変わることはない。地域医療の現場で日々、患者さんと向き合っている。附属病院では脳外科が専門だったが、地域医療では「専門」という言葉はあまり意味がないと言う。「地域医療はどんな患者さんが来るかわからない。外科でも内科でもやらざるを得ない。そういう力が身につけてから開業しないとイケないと思いますね」

現場では、心肺停止の患者さんを救命することもあるし、人の最期をみとることもある。医師としての総合的な能力が必要なのだ。

また、大きな病院と診療所、それぞれに役割がある。診療所の医師が患者さんを診て必要があれば診療科を決めて病院を紹介する。逆に病院から退院後の医療機関として患者さんを任されて、場合によっては在宅医療を行う。そのため、昔では当たり前だった隣近所の住民同士が助け合う「地域包括ケアシステム」が、高齢化社会では重要になる。このような「医療の

機能分化」が、これからの日本では大切になっていく。昨年、板橋区医師会の会長に就任してから、水野さんはさらにその思いを強くした。行政や地域とも連携しながら機能分化を推し進め、地域医療の最前線で「医療の交通整理」をすることが、自分の役目だと考える。

とはいえ、総合診療医としての限界を感じることもあると言う。

「たとえば、診療所で神経難病と診断しても、大きな病院で専門医から『神経難病です』と言われてもらわないと、諦めがつかない患者さんもいる。権威のある人間でないと、一介の診療所ではなかなか信用してくれないですよ」

だが、それを乗り越えるのに必要となるものもわかっている。

「医師は患者さんと一対一で向き合う仕事。いかに信頼を生み出すかが大切なんです。私はグローバルに仕事はできません。地域に根ざして地道にやっていけばいいと思っています」

往診靴を持って、今日も患者さんのもとへ通う水野さん。その歩みは力強く、揺らがな

帝京大学医学部5期生の水野重樹さん。板橋区で開業医をしながら、訪問診療や学校医として地域医療活動に邁進している。後輩へのアドバイスを求めると、「自分の医療を早く確立させて、それに逆らわないで継続していくことが大事です。医療技術は日進月歩なので努力も必要ですが、それとは別に大切なのは医療の考え方。それがぶれると医師としてやっていくのは大変だと思います」。

FILE #06
MOVE ON AND ON





07

「自分たちの手で、
ゼロからつくり上げた」
1期生、
母校への自負。

—
KATSUYOSHI NOBUYAMA



信山勝由

—
経済学部経済学科1970年
卒。帝京大学1期生。仲間と
ともに硬式野球部を創部。
選手やベンチマネージャーと
して活躍、卒業後はOB会
会長を15年間務めた。つく
ば家石材株式会社をはじめ
5社の社長を務める。

同級生は誰もが顔見知りだった。みんなで築いたキャンパスライフ。

今年で創立50年になる帝京大学の卒業生の数はおよそ15万人にもものぼる。現在まで卒業生たちはさまざまな分野で活躍をし、社会に貢献を続けている。その源流となったのが、半世紀前に帝京大学に入学した10代の若者たち。誕生したばかりの八王子キャンパスに集まった

1期生はわずか200名足らずだった。その1期生のひとりが、信山勝由さんだ。「とにかく学生が少なかったですね。顔を見れば誰が誰かわかるくらい。バスが出ていないときは、みんな聖蹟桜ヶ丘駅からとことこ歩いて行った。道も今ほど広くありませんでした」

帝京高校在学中に新たに大学が設立されることを知り、門戸を叩いた信山さん。経済学部に進学したが、当時は他に文学部の2学部のみ。現在、10学部30学科の総合大学である帝京大学の姿から、1期生のキャンパスライフを想像することは難しい。当初はすべてがゼロからのスタートだった。新入生たちが自らの手で学生生活の土台をつくり上げていったのだ。今や帝

京大学はスポーツ競技など多くの部活動の活躍でもその名を全国に広めているが、その礎をつくったのも当時の学生たちだった。『あれやりたい、これやりたい』と興味がある仲間が集まって部をつくりました。ゴルフ部だとか自動車部、空手道部もあったかな。人が少ないから、みんなかけもちをしていましたね。自動車部がレースに出るから協力してくれ、と

あ の 4 年 間 が あ っ た か ら こ そ 5 0 年 後 の 今 、 自 分 が あ る 。



FILE #07
JUST BE YOURSELF

卒業後は、地元の東京・小金井市で父親が営むつくば家石材株式会社に入社。以後、父親と二人三脚で事業を拡大してきた。タクシー業や観光業にも進出し、現在、グループ会社は5社を数える。大学時代に培った「人と人のつながり」に助けられたと言う信山さん。八王子キャンパスに近いこともあり周辺の企業には帝京大学出身者が多く、ビジネスでのつながりも強い。

引っ張り出されたりして」

信山さんが友人たちとともに立ち上げたのが硬式野球部だった。集まったメンバーはわずか10名ほど。ようやく1チームできるほどの少人数で、選手のレベルも決して高いとは言えなかった。信山さん自身、高校時代に野球部に所属していたわけでもなく、「ただ野球をやりたいから」という純粋な思いがきっかけだった。監督もいない、いわば野球好きが集まった同好会だった。しかし、3年生のときに、首都大学野球連盟に加盟したことをきっかけに野球部は飛躍する。監督が就任し、全国から有望な選手が集まってきた。二塁手として活躍していた信山さんだったが後輩に道を譲り、ベンチマネージャーとして卒業までの2年間を野球部に費やした。それから現在までの野球部の躍進は目覚ましい。リーグ優勝は3回を数え、プロ野球、社会人野球で活躍する選手を多数輩出する大学野球部に成長した。卒業後OB会の会長を務めてきた信山さんにとって、今の野球部は誇りそ

のものだが、50年前がなつかしくなる時もある。

「もう家族ですよ。野球部はみんなキャンパスの古い柔道場で寝起きしてね。夜、銭湯に行った帰りに、『うまいギョウザ屋に行こう』と立ち寄ったら、先生がいて一杯やったり。おおらかな時代でした」

卒業後、信山さんは家業の石材店に入社した。そして、父親とともに二人三脚で事業のすそ野を広げてきた。タクシー会社や観光バス会社など、その数は5社にも及ぶ。「新しいものを自らの手でつくりよう」、1期生として自分流にキャンパスライフをつくり上げてきた姿勢が、ビジネスにも生きてきた。仕事の上でも、この50年間、時とともに卒業生の「つながり」が大きく強くなってきたことを実感している。

「この大学は我々で立ち上がった。僕らの4年間は素晴らしかった」と振り返る信山さん。このことは、今、そしてこれからの帝京大学の学生へのメッセージと言えるだろう。自らの手で自分らしく、それが未来へとつながるのだ。

NOTICE BOARD.

NEWS

帝京大学創立50周年特設サイトに新コンテンツを公開しました。

新コンテンツの「学長の考えていること」と「帝京大学50年のへえ〜」が、帝京大学創立50周年特設サイトに公開されました。「学長の考えていること」では、沖永佳史学長が50周年のスローガン「歴史をしのぐ未来へ」に込めた意思が伝わってくる内容に。趣味、好きな言葉、尊敬する人などを聞く「一問一答」のコーナーもあり、学長の人間味が浮かび上がるコンテンツになっ

ています。「帝京大学50年のへえ〜」では、帝京大学にまつわるエピソードや驚きのトリビアを掲載。帝京大学についてより深く知ることができる情報が多く、知れば友だちに話さずにはいられないユニークな雑学も……。さまざまなコンテンツを通して、今後も在学生や卒業生に向けてメッセージを発信していきます。
http://www.teikyo-u.ac.jp/50anniversary/



CEREMONY

約5,000名の
新入生が入学しました。

4月4日(月)、2016年度帝京大学グループ入学式を日本武道館で挙行了しました。式典には約5,000名の新入生と保護者、国内外の来賓の方々にご参列をいただきました。本学の交響楽団やチアリーディング部がパフォーマンスを行い、新しい仲間を盛大に歓迎。新たなスタートを切った新入生たちが、帝京大学で新しい仲間と出会い、充実した学生生活を送ってくれることを願っています。



NEWS

被災地で医療支援活動。

熊本地震において、帝京大学日本DMATの医師2名、看護師1名、事務1名が厚生労働省から派遣要請を受け、4月18日(月)に熊本市入り。熊本赤十字病院におけるDMAT運用やドクターヘリ基地で医療支援活動を行いました。また、帝京大学の医師1名と薬剤師1名も同日に熊本市入りし、北区の避難所等で医療支援活動を行いました。



MUSEUM



帝京大学総合博物館で
創立50周年を記念した
企画展示を開催。

帝京大学総合博物館(八王子キャンパス)が、創立50周年企画展示「50年前の帝京大学～1960年代後半、多摩丘陵でのキャンパスライフ～」を開催中。50年前の学園祭や部活動などの様子、当時の聖蹟桜ヶ丘駅の写真などをパネル展示しており、本学の教育の原点を知ることができます。同時に「世界にはばたく! 伝統人形芝居-八王子車人形の世界」を開催。国際的にも高く評価される伝統的な人形芝居「車人形」の成り立ちや仕組み、現在の活動などを紹介しています。企画展示は7月27日(水)まで。

◎9時～17時 ◎042-678-3675 ◎無料
◎日曜日・祝日・大学の定める休日
http://www.teikyo-u.ac.jp/introduction/tum/



Flair SPECIAL EDITION #02 VISION BOOK

June 2016 Summer
THE TEIKYO SELF

direction & edit & design
Mo-Green Co.,Ltd.
publisher
TEIKYO UNIVERSITY

cover photograph
AYUMI YAMAMOTO

photograph
AYUMI YAMAMOTO,
MINA SOMA, KENJI NAKATA

text
TOMOHIRO OKUSA,
TAKASHI SANO

NEXT ISSUE

Flair SPECIAL EDITION #03

PHILOSOPHY BOOK

帝京大学の「哲学」を知る
インタビュー集。

50周年特別号のラストを飾るのは、学長はじめ教職員の方々。どんな人たちが、どのように大学の未来を形作ろうとしているのか。それについて知ることは、学生みんなにとっても、「帝京大生であることの意味」を考える、とてもよい機会になるはず。普段は触れることのできない、先生方の素顔にも迫ります!

*内容は一部変更となる場合があります

